

特集：予防

東京都南新宿検査・相談室の現状と今後の展望

小竹 桃子¹⁾, 飯田 真美²⁾, 前田 秀雄³⁾, 湯藤 進⁴⁾, 山口 剛⁵⁾¹⁾ 練馬区保健所大泉保健相談所所長²⁾ 福祉保健局健康安全室エイズ対策担当副参事³⁾ 福祉保健局健康安全室参与 (感染症対策課長兼務)⁴⁾ 東京都医師会⁵⁾ 東京都南新宿検査・相談室室長

1. 東京都南新宿検査・相談室設立の背景

日本における HIV 感染者・AIDS 患者の報告数の増加が止まらない。平成 15 年の全国の感染者・患者報告件数は、感染者が 640 件、患者が 336 件で、過去最高となった。東京都においては、全体の報告数が前年 368 件から 359 件とわずかに減少しているが、HIV 患者数は 93 件から 97 件と増加した。全国に占める東京都の割合は、感染者が全国の約 4 割、患者が約 3 割であり、関東・甲信越ブロックで患者・感染者とも 6 割を占める状況が続いている。

このような状況を背景に東京都は、エイズ検査の受診機会拡大と検査時の啓発・相談等の充実を図り、もってエイズの蔓延を防止することを目的に、平成 5 年 9 月東京都南新宿検査・相談室 (以下南新宿) を設置した。新宿は、東京随一の繁華街であり、またゲイコミュニティーを抱えている街にも近い。そして、感染者報告数が多い 20~30 歳代の人が受検しやすい時間帯を配慮して、開室時間は月曜日から金曜日までの毎日 15 時から 20 時までとなっており、全国的にも少ない「夜間常設」の体制として開設した。なお、平成 15 年 4 月より土、日の検査 (開室時間 13 時から 17 時) を開始した。事業形態としては、東京都から東京都医師会への委託事業となっている。

実際の検査の手順は、保健所での無料匿名検査とほぼ同様である。あらかじめ電話予約してから検査を受け、検査後一週間後に結果を聞きに行く。東京都福祉保健局健康安全室感染症対策課のホームページで、「バーチャル検査体験」に写真付きで詳細に説明されているので、一度ご覧いただきたい。

検査内容は、通常時は HIV 検査のみであるが、東京都エイズ予防月間中 (12 月 1 日の世界エイズデーをはさむ前後 1 カ月間) は、梅毒検査、クラミジア検査と一緒に受けることができる。

検査件数は、平成 5 年の開設以降、増加傾向にあり、平

成 15 年は土日検査が始まったこともあって、9,000 件を超え、過去最高となった (図 1)。一方、HIV 検査の陽性率は上昇傾向を続けており、平成 14 年については 1% を超えた。検査件数の増加傾向から鑑み、より一層の普及啓発、受検しやすい体制を整え、なんとしても維持していかなくてはならない。

南新宿における HIV 陽性件数の内訳は、男性の方が女性より 10 倍以上であるが、都全体の報告件数の割合と変わらない。男性の感染経路別では、同性間がほぼ 8 割以上で推移しており、都全体では同性間の性的接触が 6 割であることから、南新宿では、同性間の割合が都全体より高くなっている (表 1)。

2. 南新宿の陰性者アンケートの結果から

南新宿では、開設当初の平成 5 年 9 月から検査結果告知後の陰性者を対象にアンケート調査を行っている。

アンケート調査結果について簡単にまとめた。

南新宿でのアンケート調査の目的は、受検者の意識・実態を調査し、今後の施策を考える上で参考とするためである。調査の対象は、南新宿において HIV 検査受検後、陰性告知を受けた者としている。なお、日本語の読めない方や、記入場所の関係上、アンケート室が使用できない場合は、アンケートを行わなかった。調査方法は、アンケート協力者の自記式質問紙法である。

アンケート内容 (項目) は、過去何度か変化した経緯があるが、主に受検者の属性と、感染の不安要因、避妊方法等についてたずねている。HIV 検査の受検回数は、年々初回受検者が減少し、2 回目、また 3~5 回以上のリピーターの割合が確実に増加している (図 2)。

アンケートの回答率は、平均で 84%、年度途中から開始した平成 5 年や、データが欠損している平成 6 年を除くと、89% という高い回答率である (表 2)。回答者の性別、年齢階級、居住地、感染したと思われる地域、感染心配があってから検査までの期間、感染の心配の原因別 (感染経路) については、この約 10 年間でほとんど割合的に変化がないので、全体をまとめて表にした。男女比は、概ね 7 対

著者連絡先：〒178-0061 東京都練馬区大泉学園 5-8-8 大泉保健相談所

2004 年 7 月 23 日受付

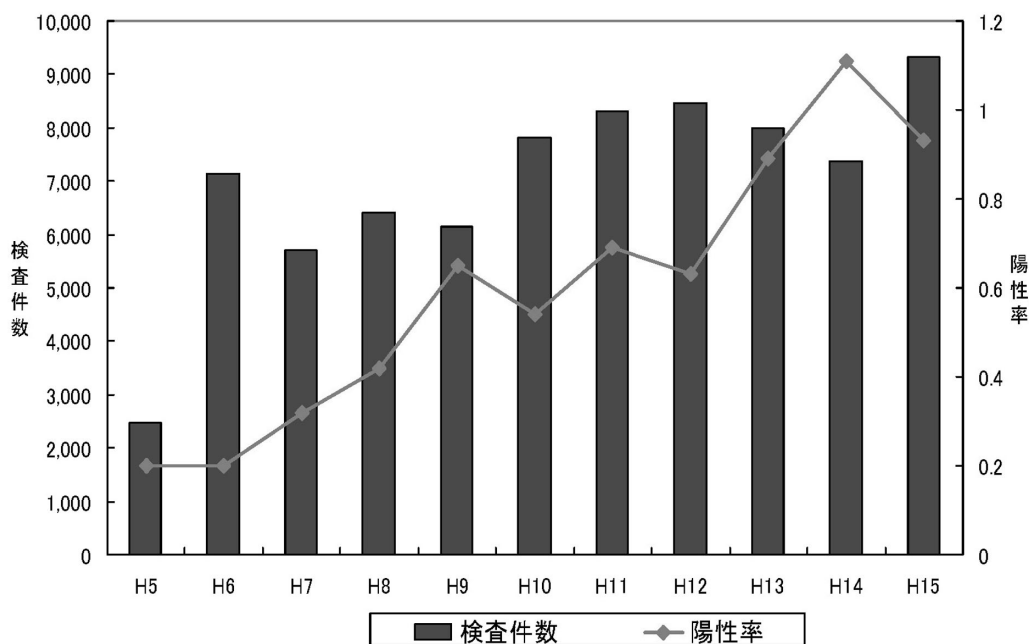


図 1 南新宿検査・相談室の HIV 検査の検査件数と陽性率の年次推移

表 1 南新宿における性別・検査数及び HIV 陽性数・陽性率

	男				女			合 計		
	検査数	HIV 陽性			検査数	HIV 陽性数	%	検査数	HIV 陽性数	%
		数	%	同性間 (%)						
1993 年(4 ヶ月)	1675	4	0.23	3(75.0)	803	1	0.12	2478	5	0.02
1994 年	4975	13	0.26	9(69.2)	2172	1	0.05	7147	14	0.20
1995 年	4041	17	0.42	11(64.7)	1659	1	0.06	5700	18	0.32
1996 年	4517	24	0.53	23(95.8)	1885	3	0.16	6402	27	0.42
1997 年	4428	34	0.77	29(85.3)	1706	6	0.35	6134	40	0.65
1998 年	5108	40	0.78	31(77.5)	2706	2	0.08	7814	42	0.53
1999 年	5593	51	0.91	32(62.7)	2725	6	0.22	8318	57	0.69
2000 年	5873	51	0.87	41(80.4)	2586	2	0.08	8459	53	0.63
2001 年	5693	67	1.18	54(76.1)	2291	4	0.17	7984	71	0.89
2002 年	5184	81	1.56	68(84.0)	2184	1	0.05	7368	82	1.11
2003 年	6576	84	1.28	76(90.5)	2742	3	0.11	9318	87	0.93
合 計	53663	466	0.80	377(80.9)	23459	30	0.13	77122	496	0.64

3 と、男性が倍以上を占めている。年齢階級については 20 から 30 歳代が多い。居住地は約 7 割が東京都であった。感染経路については、同性間の性的接触を心配としてい

る人の割合は、14% であり、異性間の接触を心配している人が多かった。

アンケートのデータが確実である平成 12 年から 15 年ま

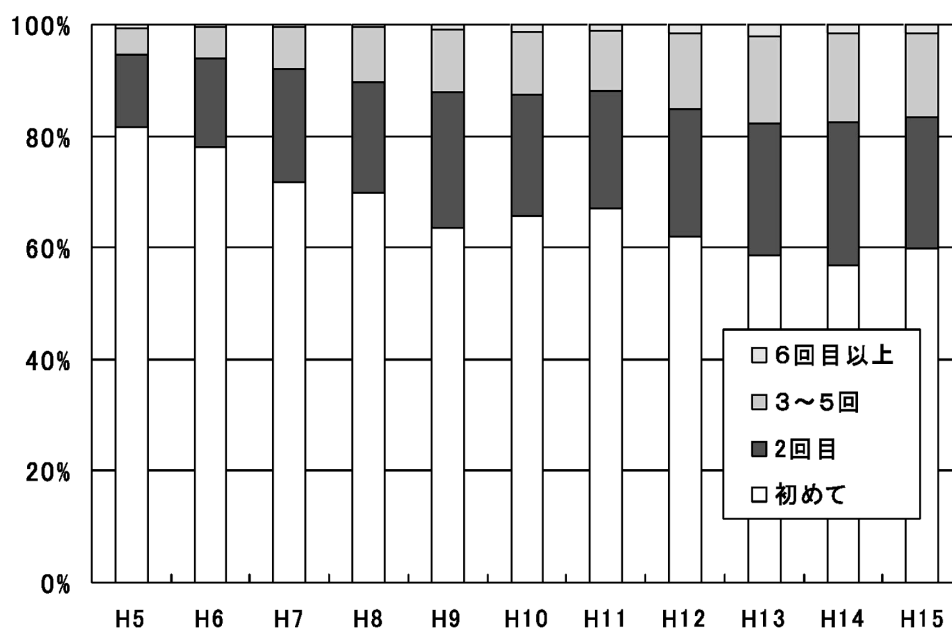


図 2 エイズ検査の受検回数の年次推移

表 2 調査対象者の属性 (平成 5 年 9 月～平成 15 年)
回答率 平均 83.6 % (42.9^(注1)～92.3%)

属性	人数	割合	属性	人数	割合
性			感染したと思われる地域		
男	44,586	68.7%	国内	51,371	79.5%
女	20,211	31.0%	海外	9,221	14.3%
不明	167	0.3%	国内と海外	1,841	2.8%
年齢階級			不明	2,214	3.4%
10 歳代	2,224	3.4%	感染の心配があってから検査までの期間		
20 歳代	33,637	51.8%	90 日未満	8,402	15.3%
30 歳代	20,067	30.9%	1 年以内	30,370	55.2%
40 歳代	5,644	8.7%	1 年以上	9,787	17.8%
50 歳代	2,325	3.6%	不明	6,431	11.7%
60 歳以上	814	1.3%	感染の心配の原因別 (感染経路)		
不明	218	0.3%	異性・特定	17,384	26.7% ^(注2)
居住地			異性・不特定	28,585	43.9%
東京都	41,930	70.4%	同性・特定	2,318	3.6%
その他	16,855	28.3%	同性・不特定	6,747	10.4%
不明	745	1.3%	その他	5,215	8.0%

(注 1) ; 平成 6 年 4～8 月のアンケートが欠損しており、回収率が低い。

(注 2) ; 割合は、全回答者数を分母にしている。

での結果で、避妊方法についてみると (表 3)、コンドームが多いが、その次に膣外射精という間違った避妊法の選択も多かった。また、年齢別のコンドーム使用頻度は

(表 4)、いずれの年齢層でも使用頻度に幅がみられた。10 歳代、20 歳代でコンドームを毎回使用する人の割合が少なかった。

南新宿を知った広報媒体について年齢別に見てみると(表5)、20、30歳代でのインターネットの割合が高い。また10歳代では、口コミが、60歳以上ではマスコミで知る機会が多いことがわかった。

これらの陰性者アンケートの結果から、属性についてはここ10年ほど変化がないが、HIV検査の受検回数では、初回受検者よりリピーターが徐々に増加してきていることがわかった。複数回受検者が陰性であり続けるための継続的な予防啓発も必要であるし、それが南新宿受検時にもで

きるような体制作りも重要であろう。また、コンドームの使用頻度が低く、膣外射精も行われているようであり、コンドームの使用頻度が少ない若年層へ、正しい避妊方法また性感染症予防の知識の啓発の必要性が明らかになった。年齢層によって、情報を得るメディアの違いが認められたので、いくつかの媒体で広報活動を行っていかなくてはならないであろう。

3. 今後の南新宿の取組み

南新宿では、平成15年4月から土日検査を開始した。平日と土日別で、1時間当りの平均人数を比較してみた(図3)。開始当初は認知度が低かったせいか、平日よりも少ない人数であったが、徐々に土日が増加してきた。特に、11月16日から12月15日までは東京都エイズ予防月間で、通常時よりも広く普及活動を行った結果とも考えられ、潜在的な受検者には、土日のニーズも十分あると推測されるので、今後もこの体制を継続していきたい。

平成15年5月より、南新宿でも相談員を配置して、火・木・土・日に相談事業を開始している。申込みは、検査の前後どちらでもよく、様々な相談に応じている。相談件数

表3 避妊方法(平成12~15年) n=29,190

	使用等あり	割合(%)
コンドーム	22,244	70.9
膣外射精	5,059	16.1
ピル	1,244	4.0
オギノ式	909	2.9
避妊なし	921	2.9
フィルム	704	2.2
その他	278	0.9

表4 年齢別コンドーム使用頻度(平成12~15年)

	10歳代	20歳代	30歳代	40歳代	50歳以上	不明	合計
毎回	133	3,350	2,786	735	419	30	7,453
半分以上	249	4,479	2,853	712	296	15	8,604
半分	88	1,441	868	222	107	5	2,731
半分以下	207	2,349	1,239	276	150	16	4,237
全くなし	132	1,544	973	315	258	7	3,229
不明	102	1,353	926	265	201	89	2,936
合計	911	14,516	9,645	2,525	1,431	162	29,190

表5 南新宿検査・相談室の年齢別情報入手先(平成12~15年)

※複数回答あり

	10歳代		20歳代		30歳代		40歳代		50歳代		60歳代		不明	計		
回答者数(人)	225		3798		2831		793		280		110		46	8083		
マスコミ	39	17.3%	699	18.4%	711	25.1%	255	32.2%	124	44.3%	58	52.7%	8	17.4%	1894	23.4%
クチコミ	115	51.1%	923	24.3%	424	15.0%	85	10.7%	48	17.1%	16	14.5%	8	17.4%	1619	20.0%
電話等	27	23.5%	442	11.6%	321	11.3%	143	18.0%	72	25.7%	26	23.6%	0	0.0%	1031	12.8%
インターネット	67	29.8%	1800	47.4%	1385	48.9%	312	39.3%	50	17.9%	12	10.9%	9	19.6%	3635	45.0%
パンフレット	19	8.4%	335	8.8%	248	8.8%	66	8.3%	32	11.4%	11	10.0%	3	6.5%	714	8.8%
合計	267		4199		3089		861		326		123		28		8893	

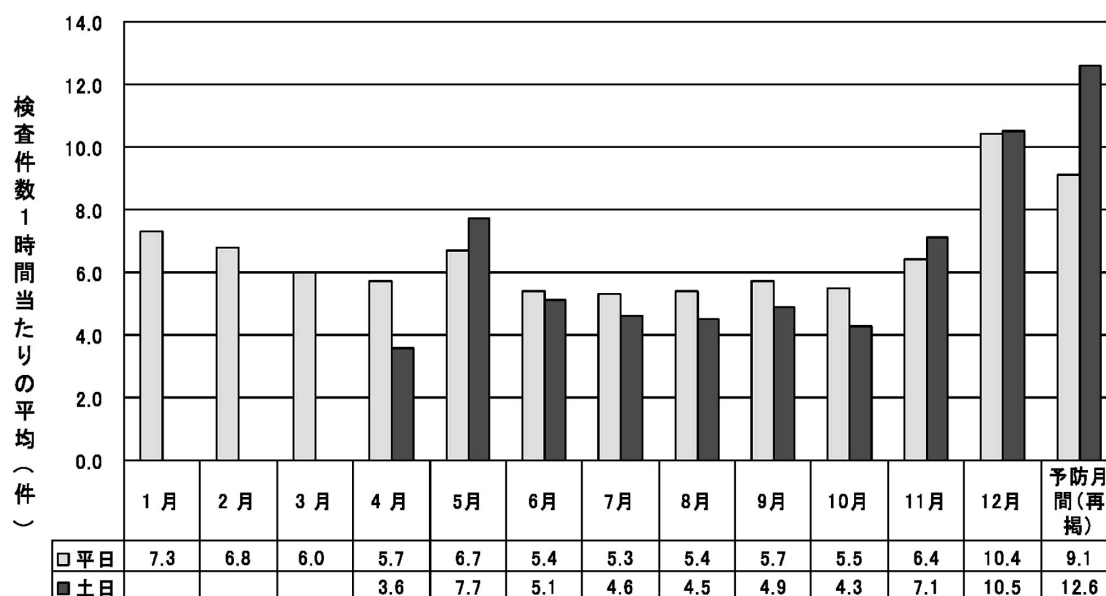


図3 南新宿検査・相談室の1時間当たりの平均検査件数
(平成15年, 平日・土日別)

表6 南新宿検査・相談室を人に教えてあげることができるかどうか (平成12~15年)
n=29,190

	できる	できない	わからない	その他	合計
人数	21,291	2,764	4,354	781	29,190
割合(%)	72.9	9.5	14.9	2.7	

は、平成15年5月から12月までで255件で、相談事業開始当初より徐々に増加してきている。男女の内訳は、男性が190件、女性が65件と男性が多く、受検者の男女比とほぼ同じである。

今後、南新宿におけるアンケートは、見直しを行い、より予防効果の高いアンケート内容に改善する方向である。また、アンケートをとるタイミングについても、全員にアンケートをとる必要があるかどうか、慎重に検討していきたいと考えている。

都保健所でも、陰性者に対してほぼ同じ内容のアンケートを平成12年から行っている。今後両者のアンケート結果を比較することにより、おのおの検査所のニーズ・役割も明確になるのではないと思われる。南新宿では、複数回受検者やハイリスクのMSMが受検していると思われ

るため、現状を踏まえた普及啓発を行っていくべきであろう。

南新宿のアンケートの中で、「南新宿を人に教えてあげることができるかどうか」という項目がある。幸いなことに「できない」というのは少数であり、現在の南新宿の体制に肯定的な意見が多かった(表6)。

患者・感染者報告数の多い東京都内で、最大の陽性件数を占める南新宿の役割は大きい。感染不安者の検査機会の拡大のためには、南新宿と保健所それぞれの利点を活かした普及の方法を検討していく必要があるだろう。

都民が気軽に受検でき、受検した人が他の人にも勧めたくなるような検査体制の構築に一層の努力をしていきたい。